

小川仁志 著

『公共性主義とは何か
〈である〉哲学から
〈する〉哲学へ』

教育評論社、2019 年

221 頁、1,800 円（税別）

本書は、哲学に携わるすべての人に読んでほしい、そう思われるほどの熱い大作である。特に「哲学プラクティス」に関わる人には外せない 1 冊である。そして、「哲学に携わる」主体とは誰なのか、果たしてこの世に「哲学に携わらない」主体など存在しうるのか、そう考えさせられるきっかけを与えてくれるであろう。

著者の小川仁志氏は、言わずと知れた日本を代表する哲学プラクティショナーの 1 人である。テレビや SNS、書籍などあらゆるメディアを通して「哲学プラクティス」している哲学者である。本書のタイトルでもある「公共性主義とは何か」という問いは、「哲学プラクティスとは何か」という問いと密接に関連していると言える。読み進めていくと、自ずとそのような考えに至るであろう。だからこそなおさら、哲学プラクティスに関わる人には必読書である。

私たちは「公共」という言葉を様々な場所・場面で耳にする。とりわけ、2022 年度から高等学校公民科で新科目「公共」が始まることは、その重要度が高いことを示している。本書は全 7 章から構成されており、小川氏は第 1 章「公共哲学とは

何か？」において、これまでの日本や世界における「公共」概念の変遷や「公共哲学」の目指す点について詳細にかつ分かりやすく記している。特にここで主張されている、アーレントの公共性における言論を伴う「活動 action」概念と、小川氏の掲げる公共性主義における「行動 practice」概念の違いは、本書を理解する上でのポイントになるであろう。そこには「哲学を単なる言語的営みから、社会を変える力へ」（48 頁）という小川氏の強い意志が現れている。

第 2 章「公共性をめぐる議論の変遷」では、1960 年代以降の公共性をめぐる議論が大きく 3 つのフェーズに区分されている。1 つ目は「討議のプロセス」（61 頁）を重視した「手続きの公共性」（61 頁）であり、2 つ目は「観察者」（62 頁）を重視した「批判としての公共性」（62 頁）であり、最後の 3 つ目は「積極的に行動を求める」（63 頁）こととしての「行動の公共性」（63 頁）である。この 3 つ目の「行動の公共性」こそが、小川氏の掲げる「働きかける公共圏」（65 頁）としての公共性主義に繋がってゆく。

第 3 章「行動を引き起こすためのエートス」および第 4 章「行動を正当化する五つのステップ」では、人々が行動に移る際の具体的な手順と「感情的なもの」（106 頁）の関連が詳細に語られている。評者が冒頭で本書を「熱い」と形容したことも、このことに由来する。本書自体が読者に「行動」を促してくるからである。ここでは特に、行動における 5 つのステップに着目されたい。①「現状に危機を覚える感受性」（117 頁）としての「危機感」（117 頁）、②「問題意識を分かち合う」（119 頁）としての「共鳴」（119 頁）、③「共鳴を行動に昇華させるエネルギー」（121 頁）としての「情熱」

(121 頁)、④「自分自身がなんらかの行動に出る」(122 頁) こととしての「かかわり」(122 頁)、⑤「行動した結果、『公』が個の幸福を実現し得る」(124 頁) という「信頼」(124 頁) である。これら 5 つの要素が、「自らの意思に基づく言葉を越えた表現形式」(83 頁) としての行動を構成していくのである。

第 5 章「公共性主義の具体的行動のカタチ」および第 6 章「公共性主義の場、あるいは主体としての公共空間」においては、社会における行動の具体的な現れや公共空間のあるべき姿が記されている。前者は「市民活動」(130 頁) などの「日常的行動」(130 頁)、②「デモ」(135 頁) などの「非日常的行動」(135 頁)、③「市民教育」(142 頁) などの「潜在的行動」(142 頁) に区分されている。特に 3 つ目に区分される「市民教育」とは、まさに「シティズンシップ教育」(142 頁) や「哲学プラクティス」(142 頁) などに具現化されており、現代を生きる私たちにも馴染み深い。

後者の公共空間のあるべき姿については、上記のような「市民教育」にも関連することが考察されている。第 5 章で指摘されているように学校とは、「新しい社会を担う人たちを育てる場」(155 頁) であり、その公共空間としての学校は「『皆』が対等な立場で批判し合える環境」(166 頁) として「異質な者が異質なままに混在する空間」(168 頁) を目指さなければならない。このように本書が提唱する公共性主義は、哲学プラクティスが目指す公共性とも非常に親和性が高いと言える。

最後の第 7 章「新たな課題」では、今後の社会における新たな 3 つの公共性の可能性が提示されている。それは、①「グローバル社会」(180 頁) における「移民の公共性」(180 頁)、②「バーチャ

ル空間」(181 頁) における「SNS の公共性」(181 頁)、③「ポスト・ヒューマン社会」(196 頁) における「AI をめぐる公共性」(196 頁) である。3 つの共通点は「市民社会や国家という枠組み」(180 頁) を超えていることである。それらはまさに私たちの誰しもが担いうる「公共空間」であると言える。これらの課題に対して、私たちは何をどう「する」ことができるだろうか。そしてこの「私たち」には誰が含まれていくのか。つねにすでに公共空間に存在している「私たち」であれば、これらの問いに「応え」ようとし、「働きかけ」ざるを得なくなるだろう。

そして評者が本書評を書くこと、さらに読者が本書を読むこと自体が小川氏のいう「潜在的行動」に繋がることを願って筆を擱き、引き続き精進していくことを決意する。

松島恒熙 (信州大学)